

拝啓 めぐろシティカレッジ 受講者の皆様

今年はすべての人にとって忘れられない一年になることは間違いないと思います。来年がどうなるのか？未来がわからないのは当たり前のことですが、それにしても非常に不確定な要素の多い2021年になりそうです。実施できなかった20年度の講座の中で、私は言葉について少しお話をする予定でした。そこで、今回、皆さんにエッセイをお届けできる機会をいただいたのをきっかけに、少しでも言葉について考えてみました。気楽にお読みいただければ幸いです。

現在「めぐろシティカレッジ」も来年度に向けてカリキュラムを考えています。以前のように、皆さんの知的好奇心に刺激を与え続けられることを関係者一同強く願っています。

敬具

令和2年11月
めぐろシティカレッジ カリキュラム委員
森 慎一郎

めぐろシティカレッジ エッセイ No. 5(令和2年11月発行)

「言葉の乱れ」について考えたこと

森 慎一郎 東洋文化研究家

先日、文化庁の「国語に関する世論調査」の結果が発表されました。最初の質問が「国語が乱れていると思うか」で、66.1%の人が「乱れている」と答えています。興味深いのは平成11年度から今回までの5回の調査で、「乱れている」と考える人が減少傾向にあることです。11年度では85.8%の人が「乱れている」と考えていたのがここまで減少したのはなぜでしょう？これについては「言葉は時代によって変わるもの」という考えが定着してきたのではないかと、という考察がありました。多分その通りでしょう。極端なことを言えば、平安時代の言葉と現代の言葉は全く違います。そのことを言葉の乱れの結果と考え、嘆かわしいことだと考える人はほぼいないでしょう。それなのに、短期間の変化については減少傾向にあるとはいえ、いまだに乱れと考える人の方が遥かに多いのはなぜでしょう。

枕草子を書いた清少納言は、最近の若い女房は何でもかんでも「すごし、すごし」と言う、と書いています。現代語では完全に定着したようですが、「超」と同じですね。「超すごい」とか。言葉の変化を担っているのは若い人で、年配の人がそれを言葉の乱れと感じるのは今も昔も同じようです。

昔、「ナウなヤングのフィーリング」という思わず赤面しそうな言い方がありました。これは乱れた日本語の例として時々挙げられていました。この中で純粋な日本語は「な」と「の」だけです。残りは一応英単語ですね。しかし全体としてはこれは立派な日本語です。そう言って良い最大の理由は語順です。これは英語の語順ではありません。純粋な日本語の語順です。つまり英単語を借用しているだけで、言葉の骨格は日本語そのもののものです。先に述べた平安時代の日本語と、現代の日本語も、語彙は大幅に変化しています。それでも言語の骨格をなす語順は変わっていません。お気づきと思いますが、私は「国語」と書かずに「日本語」あるいは「言葉」と書いています。「国語」という用語にはここで簡単に論じられない問題を含んでいると考えていますので、「日本語」を使います。

では「日本語」とは何か？実はこれも簡単には定義できません。以前、アメリカの年鑑を見ていて面白いと思ったことがあります。各国の国内事情を調べていたのですが、「言語」という項目があり、その国で使用されている言語の割合が書かれていました。日本の欄を見てちょっと意外に思いました。普通に考えれば、日本で使用されている言語は日本語、以上終わり、となりそうです。ところがその年鑑には一番多いのは日本語、次がハングル、次が中国語、さらにフィリピン諸語と書かれていました。つまりその年鑑を執筆した人々は日本は多言語国家であると見ているのです。

さて、中国には「中国語」がないというのは有名な話です。あれだけ広い国に多様な人々が住んでいる多民族国家ですから、多言語国家なのは当たり前です。しかし、中国政府は中国は一つの国であるから、全て中国語であるのは当然と言いたいようです。そう言えばタイムゾーンも一つです。つまり、言語の問題には政治が深く関わる場合があるのです。私の見た年鑑に「中国語」とあったのにもこうした理由があったかもしれません。ただ残念ながら中国の言語の欄に何と書いてあったかは覚えていません。

では我々がこの国で使われている「日本語」と思っている言語は本当に一つの言語でしょうか？沖縄方言は日本語ですか？方言ですか？別言語だという考え方もあります。八丈島の近くに青ヶ島という小さな島があります。そこで使用されている言語は別言語だという説さえあります。つまり、何が別の言語になるかは簡単に決められないのです。であれば、「言葉の乱れ」という問題も簡単には論じられないということになります。ということを踏まえて、でも個人的に違和感を感じるのと、なぜ違和感を感じるのかを以下に考えてゆきます。

私が最近非常に気になる言い方に「八百屋で野菜が売っている」というのがあります。この言い方はかなり普通に使われています。私には強烈な違和感があって、「野菜が何を売ってるんだ？その野菜はしゃべるのか？」としか思えません「野菜

を売っている」が正しい言い方です。助詞に関してもう一つ。若い頃、非常に意識していた助詞の使い方があります。私はずっと登山を趣味にしていました。「健康的で良いですね」というレベルではなく、命のやり取りをするような山でした。山で亡くなった仲間も何人かいます。普通の人には「山に登る」と言うと思います。私たちは「山を登る」と言います。この違い、お分かりですか？

文化庁の調査を見ると、多くの人が特に気になるのは敬語の使い方ようです。こここのところ以前よりは少し減ったようですが、「そのように考えてございます」というのがあります。主に国会等での役人の答弁で聞きました。正しくは「考えております」です。「おります」が謙譲語であることを理解していない人物が使うのでしょう。「おります」を尊敬語だと考えている場合もあるようです。職場内の呼び出し放送で「なんとかさん、おりましたら」と言っているのを聞いたことがあります。そういう人は「考えております」は間違った言い方だと考え、「考えてございます」と口走るのでしょうか。教養？常識？のなさを表しています。

「犬にご飯をあげる」という言い方はどうでしょう？「犬に餌をやる」でいいようにも思います。この程度なら、私は多少違和感を感じる程度です。生き物ならまだしも、無生物に「あげる」を使う人もたくさんいます。「ここのネジを緩めてあげると外せます」のような使い方です。これは個人的にはかなり気になります。こういうのがさらに極端になってきて、まさかと思いますが「犯人の方が刃物をお持ちだったので」のような言い方をする人が現実にいるようです。敬語には話者の社会的ステータスを表す機能（私は敬語を使う上品な人です、のような）もありますが、これはさすがにダメでしょう。

以前、バイト敬語として少し話題になっていた「～になります」という言い方があります。例えば、カフェで何かを注文して、店員さんがそれを持ってきてくれた時に「こちらがコーヒーになります」という具合です。これはずいぶん前から使われていて、私が意識したのはもう 20 年以上前だと思います。「するとなにかい、これはまだコーヒーではないけれど、これからコーヒーになるってことかい？」と聞き返したくなったのを覚えています。この種の言い方は他にもあって、「～の方」「～とか」「～みたいな」などもそうでしょう。はっきり言い切ることを嫌う日本人的言い方の一種でしょう。

「よろしかったでしょうか？」「～から」もよく気になると言われます。「ご注文は以上でよろしかったでしょうか？」「千円からお預かりします」のように使われます。多くの人が「よろしいですか？」「千円お預かりします」で良いのだと考えているようです。これらの敬語(?)はなぜできたのかについてはいくつかの説があります。普段敬語を使い慣れていない学生アルバイトに、簡単に使える敬語として教えた、という説があります。この説を聞いた時に感じたのは、江戸時代、吉

原の遊女屋で使われていた郭言葉（さとことば）です。田舎から買われてきた女の子に、方言を隠すために店ごとに使われていた特殊な言い回しです。有名なのは「～でありんす」のような言い方ですね。それはともかく、これらのバイト敬語を何とかしようというので、ロイヤルホストは言い換え表を作成して、アルバイト従業員を教育したそうです。面白いのはそこからで、ロイヤルホストの教育の方がマニュアル敬語を教えることになるからよろしくない、という批判が言葉の専門家から出てきました。また、「よろしかったでしょうか？」「～から」は文法的には間違っていないとも言っています。専門家は間違っていないと言っても、大多数の人は違和感を感じるのですから、不自然な言い方であると考えて良いと思います。何となく一部の専門家が逆張りをしただけのようにも思います。

これはバイト敬語ではありませんが、「おビール」という言い方を皆さんはどう感じますか？「おウイスキー」「おブランデー」「おシャンパン」とはまず言わないでしょう。外来語に「お」を付けるのは不自然だからですが、「おトイレ」などと共に、「おビール」は一応市民権を得ているように思われます。現在この「お」は美化語と言って、言い方を上品にする接頭語だと言われます。以前は敬語の中の丁寧語に分類され、誤った敬語の例としてよく出てきました。

「させていただく」も気になる敬語です。これは間違っているわけではないと思いますが、何でもかんでもこれをつけておけばいいだろう、のような、相手を考えていない、自分勝手なアリバイづくり的ないやらしさを感じます。別にこっちがさせてやったわけじゃない、と言いたくなります。きちんと物事を考えた上で、ふさわしい言葉を使う姿勢に欠けていると感じます。

次にある特定の人々の使う言葉について少しだけ。普通我々は「予定する」「計画する」「賛成する」「反対する」という言い方をすることが多いと思います。これらは文法用語ではサ変複合動詞と言います。名詞にサ変動詞「する」が付いたものです。この類の語は日本語には非常に多く存在します。これは名詞に動詞が付着した語ですから、間に助詞の「を」挿入して「予定をする」「計画をする」「賛成をする」「反対をする」とすることも可能です。で、この「を」を入れる言い方を異様に多用する一群の人々がいます。政治家です。ちょっと気をつけて政治家の言動を聞くと、呆れるほどこの言い方が出てきます。なぜ彼らはこういう話し方をするのでしょう？多分、昔の政治家に知恵者がいて、「を」を入れた方が意志的な言い方になると気づいたのでしょう。で、みんなそれを使う。ただ、現在の政治家はそれがわかっているのかいないのか？私には意志がないのを隠すために使っているように思えます。だって、何でもかんでもこういう言い方をしているのは逆に何も考えていないのを証明しているようにしか見えないからです。

政治家の言葉遣いで最近目立つのが「整理する」です。例えば「問題点を整理して議論を深めたい」のような使い方なら何も違和感はありません。しかし、今は「問題に関する議論を深めて整理したい」のような使い方をします。結論を出すと色々都合の悪いことがありそうな時、「整理する」んですね。つまり「誤魔化す」と言い換えるとピッタリくると言ったら言い過ぎでしょうか。

「まさに」も政治家の好きな言葉です。「丁寧に」「しっかりと」もそうですね。「まさにその問題をしっかりと議論し、国民に丁寧に説明する」のような言い方です。こんなの「その問題を議論し、国民に説明する」で良いはずです。先日、ある政治家がより若い政治家に指導している場面で、「もっと形容詞を増やした方が良い」と話していました。個人的には形容詞を少なくするのが文章でも話でも内容を分かりやすくするポイントだと考えているので、非常に違和感を感じました（念のために、「まさに」「しっかりと」は副詞、「丁寧に」は形容動詞です）。巧言令色少なきかな仁。

これら一連の言葉に私は強い違和感を感じます。また多くの人々が私と同様に違和感を感じているようです。それはなぜなのでしょう？その気持ち悪さから「乱れている」「間違っている」と思うことは自然なことだと思います。言葉は変化するものだとしても気持ちの悪さは残ります。この気持ち悪さ、違和感の正体は何でしょう？

言葉の乱れを嘆く人はほとんどが年配者です。若い人はほぼいないように見えます。その理由は言葉の使用歴の長さだと考えられます。年配者は若い人に比べて相対的に長いことその言葉を使用しているのですから、耳慣れない言い方を「ああ、そういう言い方があるんだ」と考えるより「なんだそれは、間違っている」と感じるのが当然でしょう。歳を重ねると考え方が保守的になるのは人間に限らず哺乳類の多くに見られる傾向のようです。ですから、そのような傾向が人間の根本にあると認めた上で、人間を人間たらしめている言葉について考えることが逆に年配者が保守的になる根本原因を知ることになるかもしれません。

歳を重ねることはどのような意味を持つのでしょうか。体力が衰えるとか、そういうことではなく、精神的なことで考えます。「歳を重ねる」という言い方は「経験を重ねる」とほぼ同じ意味で使われます。では積み重なった経験とは何でしょうか。それは様々な思い出であり、見た風景であり、考えたことであり、聞いた音楽であり、その他諸々の集大成です。つまり「記憶」です。「記憶」にはプルーストの「失われた時を求めて」を持ち出すまでもなく、匂いや温度、手触りなど感覚的なものもあります。しかし大部分は言語的なものとして蓄積されていると考えて良いのではないのでしょうか。私はその言語的な記憶が中心となって個々人のアイデンティティ（自己同一性）が構成されていると考えています。何かを体験します。

すると、その人はその体験が自分にとってどのようなものであったのかを考えます。つまり言語化します。体験が経験に昇華してゆき、記憶として定着してゆきます。その積み重ねで人は少しずつアイデンティティを作り上げて行くのだと思います。若い頃はこの作用が活発に働いています。したがって、新しい物事に敏感に反応して自分のアイデンティティ構築が進んでゆきます。年配になるとアイデンティティが出来上がっていることが多くなるので、新しい物事を取り入れることは自分のアイデンティティを少し作り替えることに繋がります。これは個人のアイデンティティにとっては危機ですから、自己防衛本能によって反発を感じます。したがって年配者は保守的になります。

我々は自分が生まれる以前の言葉を自分のアイデンティティとして持っていない。したがって、江戸時代と現代の言葉の違いを「乱れ」として見ることはありません。違和感が起きないからです。

さて、言葉の違和感です。アイデンティティが言葉によって組み立てられた記憶であるとする、自分が日常的に使用する言葉の使い方と異なった使い方に接すると、微妙に不快に感じるはず。意味は通じます。ですからコミュニケーションの道具としては使えます。それでも自分を自分たらしめている、心の奥にあるアイデンティティに微妙な刺激を与え続けます。若ければ微妙な刺激はまだ未完成なアイデンティティに取り込まれて行く可能性が高いし、年配なら完成したアイデンティティが遠ざけようとするはず。この遠ざけようとする反応こそが違和感そのものだと考えて良いのではないのでしょうか。このように考えると若者が言葉の変化の推進役であるのは当たり前だと思います。

ここまでは理屈をこねて、あまり美しい言葉を登場させませんでした。世の中には「美しい言葉」がたくさんあります。皆さんはどんな美しい言葉をご存知でしょうか。最後に口直しです。

誰でも知っている言葉だけれど、美しさを感じる言葉もあるでしょう。それらに美しさを感じない人もいます。私は昔、「雪娘」という言葉を知った時に美しさを感じました。若い時の雪女ではないですよ。信州方言だそうです。冬の朝、樹木に水蒸気が凍りついて霧氷ができます。それに朝日が当たって風が弱く吹くと細かい氷の粒がキラキラ光りながら落ちてきます。それを「雪娘」と呼ぶそうです。

言葉とは不思議なものです。であるからこそ、昔の人々は「言霊」という言葉を作ってその不思議な力に敬意を払ってきたのではないのでしょうか。